

としよかん  
だより

第 110 号

発行  
茨城県立潮来高等学校  
図書委員会

**おめでとう!**  
**読書感想文**  
**茨城県コンクール入選**

今年度は感想文が三点入選しました。入選者は次の通りです。感想文は3〜5ページに掲載しました。

**第六十九回青少年読書感想文  
全国コンクール茨城県高等学校の部**

入選	二年C組	石津 和真
同	一年A組	森 柚稀
同	一年C組	岡野 結衣

**委員会  
の活動**

**県東地区生徒図書委員研修会**

令和五年六月二十三日に行われた、「県東地区生徒図書委員研修会」に本校代表として二名が参加しました。今回はオンラインでの開催ではなく、会場である波崎柳川高等学校まで行きまし



研修会では、開会式終了後、各グループに分かれ、分科会を行いました。潮来高校はAグループの分科会に参加し、『水を縫う』という本の作者の考え、主人公の気持ちについて話し合いをしました。それぞれ人によって考え方が違い、「そういう考え方もあるのか」と、とても驚きました。

この研修会で、「自分の意見を持つ大切さ」を学びました。とても有意義な時間でした

三年 菅谷 花音

**生徒図書委員中央研修会**



令和五年十二月十四日、オンラインにて生徒図書委員中央研修会がおこなわれました。本校からは二名の図書委員が参加しました。

実践発表では代表校一校が図書委員会の活動内容や図書館の施設・設備について発表しました。今年度は勝田工業高等学校が担当でした。学校図書館の役割や重要性、本の分類法、図書の置き方の工夫などスライドでわかりやすく提示し、クイズを交えながらの発表で、とても参考になりました。

分科会では、オンライン上に指定された各室へ移動しました。本校はポップ作りに参加し、他校と交流しました。十五分という時間内に一冊の本をアピールするポップを作成するのはとても難しかったですが、他校の図書委員さんの面白い意見・考え方を知ることができ、とても有意義な時間になることができました。

先生方に「おすすめの本」の紹介をしていただきました。

ブックエピソード



校長 小澤 茂幸

「人生論ノート」

三木清 著

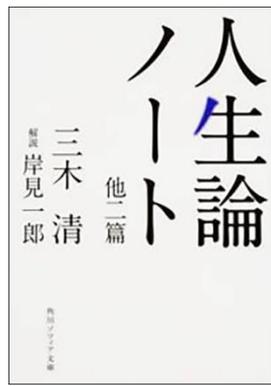
高校一年生の夏休み、宿題の課題図書として読んだ(読まれた?)三木清の『人生論ノート』。短編のエッセイ集ですが、哲学的で難解な言葉が続き、当時はよく理解できなかったというのが正直な感想です。

それでも、「幸福について」「成功について」「怒について」「孤独について」「個性について」「孤独について」など様々なテーマが並んでいるので、悩んだり落ち込んだりしたときに、テーマを選んで何度も読み返すことができます。

読み返すうちに、すっと心に入ってくるフレーズに出会ったり、魂を鷲掴みにされたり、不思議な納得感や心の落ち着きが得られたりすることがあります。今でも壁にぶち当たったときに、精神安定剤となり、私の心を支えてくれる珠玉の名文集です。

経済的な豊かさや社会的な成功のみが幸福と見なされがちな今の時代だからこそ、あらためて評価されるべき一冊なのではないかと思えます。

今まで何度も読み返しましたが、いまだに筆者の意図を正しく理解できたかどうかは分かりません。とにかく文章は難しいです。しかし、人生の意味や人間の存在について深く考えるきっかけを与えてくれた本であり、「ここから私という個が始まった」といえる高校時代を懐かしく思い出させてくれる名著です。



他二篇  
三木清  
編著 岸見一郎

「世界の果てで大切なことに気づく」

100の言葉

宮永 知恵 著



小倉 まき子

今まで当たり前だと思っていた日常が崩れた2020年。外出が思うように出来なくなった時に出会った本です。少しでも非日常気分を味わって

ください。世界中の絶景写真×偉人たちの名言がすーっと心に沁みる1冊です。



『また、同じ夢を見ていた』

住野よる 著



高橋 大夢

「先生、頭がおかしくなっちゃったので、今日の体育を休ませてください。」

少女のこんな台詞から始まるのが、映画化されたベストセラー『君の臓腑をたべたい』の著者住野よるさんの二作目『また、同じ夢を見ていた』です。

主人公「小柳奈ノ花」は、「人生とは〇〇」が口癖のちよつと癖のある女の子。そんな奈ノ花が学校の国語の授業で幸せについて考える場面があります。「幸せとは何か」という授業のテーマがまさにこの物語のメインテーマであり、登場人物との出会いを通じて奈ノ花が「幸せとは何か」考えていく物語になっています。

奈ノ花が幸せについて考えていくにあたり、リストカットを繰り返す女子高生「南さん」、優しくてかつこいのお姉さん「アバズレさん」、そして奈ノ花のことをよく理解し素敵な言葉くれる「おばあちゃん」の三人の女性と出会います。この三人との出会いが、幸せに対する奈ノ花の考え方やその後の人生に大きく影響します。「後悔」が三人に共通するキーワードとなっており、この点が物語において重要になってきます。三人が「また、同じ夢を見ていた」と同じセリフをつぶやく場面があり、タイトルの意味が段々わかってくる点も読んでいてわくわくします。

人生のターニングポイントとなる選択をしていく奈ノ花と同じように、私の人生においても、大きな決断を迫られた出来事が二つあります。一つは、忘れもしない、東日本大震災により崩壊し、福島第一原発の影響により汚染されてしまった福島県を離れて山形県へと避難する母と弟と別れて、父と愛犬とともに福島県に残るという選択をした時のことです。そしてもう一つは、高校卒業時にやはり数学を勉強したいという思いから、なんとなく受験して合格していた大学の工学部を辞退し、次の年に理学部数学科へと進学し直した時のことです。いずれも自分が本当にやりたいこと、大事にしたいものを考え、自分の意思で絶対に後悔しない方を選択しました。あの時の決断があったからこそ、私の今があります。だからこそ、卒業後の進路を左右するよ

うな選択をする機会が増えてくる高校生の方々にぜひ読んでほしいなと思いい、この本を選びました。登場人物の印象的な台詞や住野よるさんの独特な表現もこの物語の魅力の一つです。最後にその一部を紹介するので、気になる言葉がありましたらぜひこの本を手にとってみてください。

「人生って虫歯と一緒よ」「名前を大切な思い出をいれるのと同じ場所にきちんとしまいました。」「不思議な声でした。ありがとうときようなら声を合わせたみたいな。」「いいかい、お嬢ちゃん。人生とはプリンと一緒にた」



読書感想文

私の色

石津 和真

私がこの本を読んだきつかけは、普段行っている本屋で、本の表紙が目にとまったからです。灰色の世界とはどういう意味を持つているのか、この言葉を見ただけでは分からずとも興味を惹かれました。実際に読み始めると、最近の高校生と変わらない学校生活の風景がよく描かれており、主人公に感情移入しやすく、読み進めていくたび、共感できる場面があり、とても楽しく読むことができました。

この本の物語は、いつも友達に意見を合わせてしまい、自分を見失ってしまつた高一の楓が、ある日、色が見えなくなる『灰色異常』を発症し、人の個性を表すオーラだけが色づいて見えるようになる場面から始まります。私も自分の意見を持つことがあります、友達の見解に合わせることもあり、しかし、私は、友達に意見を合わせることで自分を見失うようなことなのかと考えると、以前はそうは考えなかつたと思います。意見を出す場で正しい意見というのはいらないのではないかと思っており、自分の意見を持つた上で他人の見解に合わせるのはいかたどかたとは思っていません。

『さよなら、灰色の世界』を読んでいて、とても共感できて、心に残っている言葉があります。それは、楓が物語の途中で出会う良が言った「どう見られるかより、好きな自分でいれたい」という言葉です。楓とは真逆で、意志が強く、意見をはっきりと言う良からのこの言葉は楓にも特別な言葉だと思えます。私も周りの目を気にして、できるだけ良く見られるように行動していたことがあります。その頃はあまり楽しいと思えるようなことが少なく、気を使うことも多くて、疲れてしまつたことがよくありました。しかし、本来の私を出しても周りの人は仲良くしてくれれ私自身も楽しく生活を送れるようになりまし。周りの人の意見に合わせてしまつた人の中には様々な考えを持つている人がいると思います。話し合いを終わらせたいという人や、意見を合わせた方がみんながまとまりやすいと考える人、もしくは、違う意見を出せば何か言われるのではと考える人もいると思います。楓は三つ目のパターンでした。なぜこのようなことを考えるのか、それは、自分の居場所を守るためでした。楓のクラスメイトには、自分の意見と違う意見を出すだけで悪者にする人がいました。なぜそれだけのことで人を悪者にするのか、はじめを始めたりののか、不思議に思いました。私は、このクラスメイトも、自分の居場所を守るためにこのようにことをしているのではと考えました。学校の中で自分を守り生きるため

に必死で、手段を選ばない人も中にはいると思います。それは、誰もとは自分で守らないといけないからです。自分を守るための手段、たつたとしても、誰かを犠牲にするのは良いこととは言えません。それでも、他人より自分を守ることを選択する人はたくさんいるかもしれません。

『さよなら、灰色の世界』を読んで、学校生活においての人間関係の難しさを感じました。友達は大切ですが、自分のことも大切、どのような行動をとるのが大切なのか考えさせられる作品でした。

読んだ本

書名 『さよなら、灰色の世界』  
著者 丸井 とまと



『グレート・ギャツビー』を読んで

森 柚稀

昨今、文豪をモチーフにした作品が世に広まっているのはご存知だろうか。私も例に漏れず熱をあげ、これをきっかけに様々な文豪を調べた。その時にフィッツジェラルドを知り、また代表作であるグレート・ギャツビーに目をつけた。過去に江戸川乱歩や太宰治等の日本の文豪の作品を読んだ際には文章の表現が難しく、途中で挫折することも少なくなかったため、海外文学であるグレート・ギャツビーを読書感想文の題材に選ぶのはとても勇気のいる決断だった。しかし、自分にとって良い経験になるのではないかと考え、こちらを題材にさせて頂いた。

「豪華な邸宅に住み、絢爛たる栄華に生きる謎の男ギャツビー。彼の胸にはかつて一途に愛情を捧げ、失った恋人デイジーへの異常な執念が育まれていた。」という文を読んだ際、失った恋人を取り戻す為の物語がギャツビー視点で描かれていくのだと思っていた。実際はニックという第三者からの視点で、当事者でないからこそその考えや行動が見えて、よりギャツビー本人やその周りの人物のもの哀しさが出たように感じる。

私の中でデイジーは正に「悪女」といった感想を抱く女性だった。ワガママで狡猾な印象を持った。私の読んだ野崎孝訳の本には「ばかな子だったらいいな。女の子はばかなのが一番いい

んだ、きれいなばかな子が。」という言葉で表されたデイズイのセリフがある。これにデイズイの価値観が現れているが、この価値観があったからこそ、愛に純粹であったギャツビーは悲劇的な最期を送ることになったのだろうかとか考えると、恋情とは怖く、美しいものだという感想をもった。

豪華絢爛なパーティーを連日開いていたギャツビーだが、そのギャツビーと関わりに行く参加者は少ないといった表現があった。富、財産を手にした者に群がる群衆の軽薄さ、ギャツビーにとつて狂騒的な生活のほろ苦さ、ことごとく感じられる空虚さなんとも言いえない感情を沸き上がらせる。上流階級の間も、富があるから幸せという訳ではないのはギャツビーを見て少し理解したように思える。

この本を読んでいて一番印象に残ったのは最後の場面だった。ギャツビーの葬式に参加した人数は少なく、パーティーに参加した人たちやデイズイさえも参加していなかった。ギャツビーが亡くなった原因の一端になっているデイズイも来なかったということにはこの本一番の驚きと寂しさを感じた。薄情な人間ばかりだったのだろうか。どうして葬式に来なかったのだろうか。疑問が募った。

ところで、私は一つ、タイトルについて疑問を持った。タイトルは彼の名前ギャツビーに「華麗なる」という形容詞がついている。なぜ華麗なるギャツビーというタイトルになったの

うか。私は、一人の人間を愛し続けたこと、愛した人間を手に入れる為に自分にできることの全てをやっていることに對して「華麗だ」と称したのでないだろうかとか考えた。解釈の余地はまだまだあるのでもう少し考えてみたいと思う。

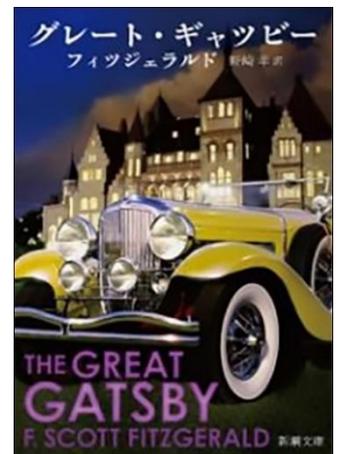
ニツク視点で読み進めたこの本だが、私はニツクやギャツビー以外の登場人物に對して良い感情を持つことが出来なかつた。別の視点でこの物語を読んだ場合、また登場人物たちの印象もかわつたのではないかと思う。それから、時代背景を理解するのにも時間がかかつた。自分に関わりのある要素が全くないため、読み進めるのが大変だ。だが、中盤頃まで読むと展開が進んでいくようになり、読みやすくなつていった。グレート・ギャツビーが執筆された時代のアメリカの情勢や作者フィッツジェラルドについて調べながら読み進めるのも面白く、勉強になつた。この作品は映画も作られているようなので、映像とともに、別の視点に注目して見てみたいと思う。

読んだ本

書名 『グレート・ギャツビー』

著者 フィッツジェラルド

訳 野崎 孝



「ばかまじめ」な私

岡野 結衣

私はこれまでの人生で100%の努力をしたと自信を持って言える経験がある。高校受験やこれまで取り組んできたスポーツなどがその一例だ。世間ではよく「努力は必ず報われる」と言う。しかし、100%の努力をしたきた私の経験上、報われた努力というのは少ないと思う。高校に入学し、その半分が終わろうとしている今、少しずつ自分の将来のことを考えていかなければいけない。そんな中で、100%の努力が報われないという事実は私の心を不安にしかせていかなかった。そのような事を考えている時に、「100%の努力」というタイトルが目にとまった。著者はインターネットを中心に活動しているひろゆき氏である。ただ単に見ると、「成功者」のように感じられるひろゆき氏が1%の努力しかしていないとはとても考えられない。常に100

0%の努力をしていて思ったような成果を挙げることのできない私との違いとは一体何なのかという点に興味を抱き、この本を読んでみることにした。まず、始めに「正しい努力」をすることだ。しかし、そう簡単なことではない。世の中には自分の力で変えられないことと自分の力ではどうにもできないことがある。例えば、自分自身の生活習慣や行動は変えることができる。しかし、家庭や自分の置かれた環境、遺伝などは変えようがない。また、そのことを理解せずにガムシヤラに取り組んでも、そこには無駄なことが生じてしまう。そのために努力をする前には、よく考えることが大切だと思う。何かを成し遂げるためには、どういったことが必要で、今、何が足りていないのかを考察する時間が必要だと考える。そうしたことを考えたうえで努力するからこそ成功に近づくと感じる。今の私は高校生という立場で、与えられた課題に対して、明確な答えがあり、間違えたらどこが違うのかと振り返って反省ができる。しかし、社会へ出ると正解の無い問題が沢山存在すると思う。そういった場合に遭遇したときにこそ、やはり正しく考え、努力するという癖が大切ではないかと考えた。また、文章中でイチロー氏の言葉「努力を努力と思っていない時点で、好きでやっている人には勝てない」とあった。私も似たような経験をしたことがある。私はフルコンタクトの空手を習っており、大会にも出場している。その中で

メキメキと力をつけている選手もいれば、ある一定のレベルで止まってしまっている人もいます。その人達の違いをよく観察すると、強い人たちは全員が楽しんで練習や試合に臨んでいた。そのことから、イチロー氏の言葉にもあるように、「好き」という気持ちで何かをすることが、一番正しい努力ではないかと考えた。

次に「自分の軸」を持つことだ。私は努力は絶対的なものであり、相対的なものではないと考える。しかし、実際のところ「全員がこのくらいやっている」とか、「私はある人よりも頑張っている」ともしくは足りていない人と比較して考えてしまう。そして、そのうち周りからの見え方や、他人の評価をする努力となってしまう。しかし、それでは自分の目指すゴールに近づいていないと言えない。だからこそ自分の軸を定めることが大切だと考える。ひろゆき氏であれば、睡眠は何よりも大事で、映画やゲームなどのエンターテインメントに触れる時間を重要視している。このように、私自身も絶対に譲れないものを決めることが大切だと感じた。この軸さえぶれることがなければ、たとえそれ以外の要素が変化していったとしても「正しい努力」の方向性を間違えることはないと思う。それは木と似ていて、幹さえしっかりしていれば、多少環境に影響されても枝葉はしっかりと育ち立派な木となる。だからこそ自分自身の軸や物事を判断する基準をしっかりと決めることが重

要だと思う。また、変化を恐れるのではなく、同様により充実した枝葉を育てるために柔軟に対応していく能力も大切だと感じた。

私はこの本を読むことを通して、今までの私が「ばかまじめ」であることに気づいた。全てに全力で取り組むことが正しいという私の価値観が一気に変わった。しかし、私はひろゆき氏のような「1%の努力」で成功を収める人間に今から変わっていくのはとても難しいと思う。だからこそ、自分自身の軸を見つげるために、私は「自分がどういう人間なのだろう」と自己分析して、「正しい努力」を行い、私なりの「1%の努力」の仕方を見つけていきたいと感じた。

読んだ本

書名 『1%の努力』  
 著者 ひろゆき「西村 博之」

